



学校だより

<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/yokohamafukayadai>

令和4年1月31日

2月号

横浜市立横浜深谷小学校

校長 角井 治朗

バトンをつなぐ

副校長 幸保 陽子

今年度も残り一か月となりました。6年生はいよいよ卒業が目の前に迫り、改めて自分自身の成長を見つめ、小学校生活を振り返る時期に差し掛かってきました。「環境や立場が人をつくる」と言われますが、まさに、6年生は最上級生として、様々な活動に取り組み、自信をつけたり、思いやりの気持ちを育てたりして成長してきました。新型コロナウイルスの感染が拡大し、教育活動に制限がある中での1年間でしたが、その中でも、行事や異学年交流の場を工夫して設け、学級や学年の枠を越えて、互いに関わり合ってきました。

様々な場面で6年生の姿を目にしてきた下級生。6年生は、いつでも下級生の目線に立って、声をかけたり気遣ったりして行動していました。「全校ウォークラリーでは、下級生の歩くペースに合わせてくれたんだよ。」「休み時間に一緒に遊んでくれてとても楽しかった。」「委員会活動ではアイデアをたくさん出して活動をリードしてくれた。」今の6年生が行ってきたことが下級生の心にしっかりと刻まれてバトンがつながっているようです。下級生は、6年生に、感謝の気持ちをもったり、憧れや尊敬の念を抱いたりしています。

代表委員や委員会活動、クラブ活動など、活動を引き継ぐ時期に入っていますが、まん延防止等重点措置が適用されているために、思うように引継ぎが行えない状態です。しかし、そのような中でも、6年生は、自分たちがやり遂げてきたことを5年生に「伝える」活動を工夫して行っていきます。

学校では、異学年と交流し触れ合う環境をつくることを大切にしています。それは、上級生にとって、自分たちで考え、試行錯誤しながら活動を作り出していく機会となるだけでなく、下級生にとっても、上級生にあこがれを抱き、自分の目標としたり、次の学年への意欲につながったりしていくからです。

毎年バトンをつないでいくこの時期に、改めて「自分は、〇〇ができるようになった」「次の学年では、こんなことをやってみたい」と、自分の成長を実感しつつ、次年度に向けて希望をもって学年末が迎えられるように職員一同、力を尽くしていきたいと思っております。これからもご支援のほど、よろしくお願い致します。